

『ピエール・ブーレーズの生涯と作品』

伊藤美由紀（2800文字）

今世紀最大の音楽家の一人であるピエール・ブーレーズが、今年1月5日に90歳でバーデン・バーデンで亡くなり、6日には、ル・モンド、ニューヨーク・タイムズ、BBC ニュースなど世界中のメディアで追悼記事として大きく取り上げられた。27日には、パリに昨年オープンしたばかりのフィルハーモニー・ド・パリで、急遽、追悼公演が行われた。彼に関わった音楽界の重要人物がお悔やみを述べ、演奏の合間に過去のブーレーズのインタビュー、若手指揮者の為のセミナー等のライブ映像を交えた2時間にのぼる公演となった。作曲家、指揮者、教育者、文筆家、組織の創設者として、現代音楽のみならず、思想、他分野にも多大な影響を与えた芸術家であるブーレーズについて、彼の歴大な業績、作品についてまとめてみる。

ブーレーズは、1925年フランスのモンブリゾンにエンジニアの父と母の間に生まれる。6歳から地元のカトリックスクールに通い、ピアノも学び始める。子供の頃から音楽と数学の才能に優れ、父の希望によりリヨンで数学の道に進む。しかし、音楽への関心が強くなり、パリのコンセルヴァトワールに入学する。幼少の頃からの数学的な能力は、後の音楽テクノロジーへの関与、論理的分析力にも繋がるであろう。1944年にメシアンのと声クラスに入る。彼の分析のクラスからは『聴く』ということを学んだと語り、後の音楽活動に大きく影響する。メシアンの同じ作品を何度も録音していることから、彼への敬意が伺われる。1945年には、ルノー・バロー劇団と知り合い、オンド・マルトノを担当するようになる。翌年には、劇団の音楽監督を任され、指揮の見習いもするようになる。1945-50年にかけてオンド・マルトノを度々演奏し、オンド・マルトノを含んだ《婚礼の顔》(1946-51)、《オンド・マルトノのための四重奏曲》(1945-46)の作品も書いている。また、ピアノの技術も卓越しており、1952年には、メシアンの《音価と強度のモード》の音列を引用した《2台のピアノのためのストリクチュール》第1巻(1951)の初演をメシアンと行う。その1、2巻の録音もイヴォンヌ・ロリオと本人で行われていることから理解される。ジャン＝ルイ・バローの支援により演奏会を開く許可をもらい、1955年にはドメヌ・ミュージカルと名付け、音楽監督として活動を始める。当時、現代音楽を扱う経験豊富な指揮者が少なかったこともあり、ブーレーズが自ら立ち向かうことに

なる。翌年、《ル・マルトー・サン・メートル》のフランス初演も行う。ルネ・シャールの詩集から3つの詩を使用したアルト歌手と6つの楽器のための特殊な編成による作品である。シェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》からの影響を受けており、1955年のバーデン・バーデンでの世界初演では絶賛され、作曲家として国際的知名度を得た。その後、1958年にはバーデン・バーデンに移転する。20代で、作曲家、指揮者としての音楽活動の土台を固めていた。また、1950~60代に声楽作品の創作が集中している。シャールの詩による《婚礼の顔》(1946)、《水の太陽》(1948)、《ル・マルトー・サン・メートル》(1953-55)、マラルメの詩を使ったソプラノとオーケストラの為の《プリ・スロン・プリ》(1957)、ミショーの詩を使ったテープとオーケストラの為の《力のための詩》(1958)、がある。

30代以降、教育活動にも力を入れていく。バーゼルの音楽院、ハーヴァード大学、ダルムシュタット音楽祭をはじめ、作曲家、指揮者のためのセミナーを開講する。1963年には、《春の祭典》初演50周年記念公演で、フランス国立管弦楽団を指揮し大成功をおさめる。パリ・オペラ座では、ベルクの《ヴォツェック》のフランス初演の指揮をも行う。ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団の正指揮者(1971-77)、同時にBBC交響管弦楽団の音楽監督(1971-75)をも勤める。1970年にジョルジュ・ポンピドゥー大統領により、パリ中心地区に現代美術館を中心とした複合文化センターの建設が決定され、ブーレーズは音楽に関する計画の担当を任される。その後、1977年にポンピドゥー・センターが開館する。同時にポンピドゥー・センター管轄下のIRCAM(フランス国立音響音楽研究所)が隣に建設され開館する。ブーレーズが創設し管理運営を任せられ所長に就任し、1992年まで勤める。IRCAMの開設は、テクノロジーを音楽と融合させることで、作曲家に更なる多様な可能性を与えることとなる。IRCAMでは、最新のテクノロジーを使用して、科学者と音楽家が交流しながら実験を通して作品制作を行える貴重な機関である。作曲家の意見を尊重し、最新のコンピュータ・テクノロジーを駆使し、科学者たちがソフトウェアや新たな音響テクノロジーを開発している。ブーレーズ本人が、IRCAMのテクノロジーを使用した作品には、6名のソリスト、アンサンブルとエレクトロニクスの為の《レポン》(1981)、ソクラリネットと予め録音されたクラリネットの為の《二重の影の対話》(1986)、MIDIフルートとアンサンブル、エレクトロニクスの為の《固定・爆発》(1991-93)、ヴァイオリンとライブエレクトロニクスの為の《アンテ

ームⅡ》(1997)が挙げられる。各々の作品は、エレクトロニクス無し、あるいは異なった編成から始まり何度も改訂されている。また、空間的にもコンピュータで音の動きなどを制御するために、IRCAMで開発されているスパシアリザトゥールのシステムを使用している。1976年、IRCAMの所長に就任したと同時に、31名のソリストからなる現代音楽を専門としたアンサンブル・アンテルコンタンポランを創設し、音楽監督を務め始める。アンサンブルのリハーサルはIRCAMで行われる事もあり、演奏者が電子音響に触れる機会も多くなり、電子音響を使用した作品の演奏も行う。ブーレーズ本人の大半の作品は、アンサンブル・アンテルコンタンポランと自分の指揮により録音している。自作の《レポン》は、アンサンブル・アンテルコンタンポランとIRCAMにより共同開発した電子装置を使用している。

ブーレーズの創作活動では、同一作品を年数をかけて改訂し、第2~4稿まである作品も多数ある。指揮者である彼は、初演後、新たな可能性を見だし、更に磨き上げる為に新たなバージョンを生み出すのであろう。加えて、ブーレーズにとって、言語表現は、現代音楽を広める為に重要であると考えていた。教育活動、解説付きのコンサート、ラジオやテレビ放送、公共の場での討論、インタビューなど広範にわたる。多様な著作物も定期的な出版している。コミュニケーションを重視し、無限の可能性をいつも意識して活動をしていた。晩年、2004年にはルツェルン音楽祭アカデミーを創設、2009年には京都賞を受賞、グラミー賞、グレン・グールド賞など世界各国で功績を讃えられている。ブーレーズの90年の生涯は、音楽の無限の可能性への追求であった。